

Title	仮説検証課題における推論過程の検討
Author(s)	和田, 一成
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41298
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	和田 一 成
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 14325 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科行動学専攻
学位論文名	仮説検証課題における推論過程の検討
論文審査委員	(主査) 教授 中島 義明 (副査) 教授 吉田 光雄 助教授 赤井 誠生

論文内容の要旨

人間の推論についての研究は、従来「分析的」な処理を仮定してきた。この過程は経験則によくあてはまるものであるが、近年では十分な試行の末に行われる仮説検証でさえも初期の直観的な判断の影響を受けることが示され始めている。

Evans and Over (1996) は、逆にこのギャップを人間の推論の本質であるとして、これをもとにした2段階処理モデルを提唱した。彼らの主張は、「人間の推論には日常の経験がもとになった効率重視の「合理性」を基盤にするヒューリスティック段階での推論と、分析的で論理的という意味での「合理性」を基盤にするアナリティック段階での推論とが存在する。さらにその関係は、ヒューリスティックな段階での推論がアナリティック段階に先行し、アナリティックな推論を大きく制限するとした。つまり、両者は情報の選択過程とその利用過程である」というものである。

Evans (1996) は、この主張を証明するために Wason 選択課題におけるカード探査時間を測定する実験を行い、選択されたカードが選択されなかったカードよりも有意に長く探査されるという結果を得た。推論が単純な一つの段階で行われた場合、選択/非選択が決定した時点で課題が終了するのでこのような差は出ない。一方、従来の心理理論やメンタルモデルによる説明が支持されるならばより論理的な区別による効果が必要である。従って、この探査時間の差は、ヒューリスティックな判断の後に処理対象が選択カードに限定されたアナリティックな推論が行われたのだという2段階モデルによる説明のみを支持している。本研究でもこの理論を支持する立場をとり、人間の推論を検討した。

まず、実験1では抽象課題・主題化課題の両課題でカード探査時間がカードの選択/非選択によって異なることが示された。この結果は実験2でも補完され、2段階処理モデルが強く支持された。このモデルによる説明としては、選択されるカードの探査時間が多くなるのは、ヒューリスティック段階で選択された情報についてのみアナリティックな処理が行われるという仮定による。すなわち、選択そのものに影響力を持つのはヒューリスティック段階なのである。

この結果を受けて実験3では、ヒューリスティック段階での効果がどのような情報に基づくのかが検討された。その結果、提示カードの比率を変化させることにより、被験者の選択反応も変化することが示された。具体的には、当該カードの出現率が小さいほど選択率が大きくなった。このような、情報量による効果は、近年の推論研究における

ヒューリスティックな判断の研究（例えば、Oaksford, & Chater, 1994, 1996 ; Stevenson, & Over, 1995）と一致する。しかし、この効果の大きさは、被験者が問題の内容についての理解が低かったために生じた可能性も否定できない。これは、従来の知見と反して文脈要因の効果が全くなかったことを説明する。ただし、抽象課題における文脈要因については、カードでの否定明示との交互作用により検出されており（例えば、Jackson, & Griggs, 1990）、今回の実験ではこの点の検討が不十分であったことは否めない。

続く実験4, 5では、アナリティックな段階を従来の Wason 選択課題よりもクローズアップさせた形で取り出し、ヒューリスティック-アナリティックの両段階の関係を検討した。結果は、仮説の検証という明らかに情報利用段階の処理であっても、内容は客観的な論理性とは異なる論理性を持っていた。ただし、行動としては、アナリティックな段階を経ることにより、より分析的な探査行動がとられたり、あるいはヒューリスティック段階で選択された情報が論理性の有無に関わらず積極的に利用される傾向があるなど、本人なりの「論理」が大きく介在する段階であることを示していた。

これらの点から、ヒューリスティックな段階は自動的判断の段階であり、情報量などの量的概念に強く影響される処理を行うこと、また、アナリティックな段階は客観的な論理性は必ずしも持たないが、推論者本人は自分なりの論理を持ってヒューリスティック段階での選択情報を十分に活用した分析的な処理を行うことが示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人間の行う推論過程について、実験心理学的手法を用いて検討し、従来の様々な推論に関するモデルを統合的に検証しようと試みたものである。

実験1, 2, 3は、さまざまなモデルの妥当性を検討するため計画された。その結果、推論は、ヒューリスティックな直観的過程を経た後にアナリティックな過程が発動する、という2段階モデルが強く支持されることが明らかになった。これをふまえて行われた実験4, 5では、それぞれの過程の相互関係について検討された。この中では、ヒューリスティックな過程の内容がアナリティックな過程に大きく影響を及ぼすことや、アナリティックな過程で行われる処理には、客観的な論理性とは異なるいわば推論者なりの論理が大きく介在することが明らかにされた。

本論文は、従来より問題となっていた推論過程における主観的要因の影響のメカニズムについて新しい理解を与えるものであり、その方法論的考察の明晰さと共に特に優れたものである。これらより、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。